論　文　ニダバ（*Nidaba*）49(2020), 31-38

カムチベット語捧八[Phongpa]方言のわたり音/r/

鈴　木　博　之

1　はじめに

本稿では、中国雲南省迪慶 [bDe-chen] 藏族自治州維西 ['Ba'-lung] 傈僳族自治県巴迪 ['Ba'-sdod] 郷捧八 [Phong-pa] 村で話されるカムチベット語 Phongpa 方言に現れるわたり音/r/について記述する。同時に、同方言の音形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）との対照を行い、わたり音/r/は古音の留保であることを確認する。次いで、この特徴の雲南のカムチベット語における歴史言語学的位置づけについて考察する。

雲南省内のカムチベット語の下位分類は Suzuki (2018) に最新の見解を整理したが、Phongpa 方言は当時未記述の状態であったため、同方言の方言所属は未知である。その地理的分布から考えれば、得榮徳欽 [sDe-rong 'Jol] 方言群雲嶺山脈西部下位方言群に所属する可能性がある。しかしながら、Phongpa 方言にはこれまでに記述されてきたいずれの雲南のカムチベット語方言にも認められない特徴がある。それはわたり音の位置に現れる/r/音である。この音特徴は、カムチベット語の諸方言においては、ただ１つの地点で報告がある（鈴木 2007 の記述する四川省丹巴県中路郷の sProsnang 方言）のみで、極めて珍しい現象である。Phongpa 方言におけるわたり音/r/をもつ例を記述し、その蔵文対応形式を明らかにすることは、単に方言記述のみならず、チベット方言学にも貢献しうる。

本稿で議論する方言資料は、特に断りのない限り、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主として議論する Phongpa 方言の調査協力者はドマ・ヤンゾン [sGrol-ma gYang-'dzom] さん（女性；40 代；捧八自然村出身）およびメトツォ [Me-tog-mtsho] さん（女性；30 代；捧八自然村出身）である。

2　Phongpa 方言の音体系概観

Phongpa 方言の音体系は以下のようである。

【音節構造】最大で $^{C}C_{i}GVC$ である。

【声調】語声調で、¯：高平、´：上昇、`：下降、ˆ：上昇下降の４種。

【母音】各音素に長短および鼻母音/非鼻母音の対立が存在する。

i　ʉ　u ɯ

e　ə ɵ　o

ɛ　ɔ

a　ɑ

【子音】子音連続に現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前	硬口蓋 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	$ʈ^h$			k^h	
	無気	p	t	ʈ			k	ʔ
	有声	b	d	ɖ			g	
破擦音	無声有気		ts^h	$ʈʂ^h$	$tɕ^h$			
	無気		ts	ʈʂ	tɕ			
	有声		dz	ɖʐ	dʑ			
摩擦音	無声有気		s^h	$ʂ^h$	$ɕ^h$			
	無気		s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z	ʐ	ʑ			ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ȵ̊		ŋ̊	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音		w				j		

子音連続には主として前鼻音、前気音、わたり音を含むものがある。

3　Phongpa 方言の具体例

本節では、Phongpa 方言おける G の位置に/r/を含む子音連続をもつ具体例を示す。具体例は華侃　主編 (2002) を用いた語彙調査で得られた語形式を対象とし、形態素による重複には特に注意を払わず掲げる。

Phongpa 方言の単子音/r/は、それが現れる位置にかかわらず、その音標文字の定義通りふるえ音として実現する。この特徴は、広く雲南のカムチベット語方言に認められる。これには、/r/と/ʐ/が音体系として対立するといった事情があるものと考えられる。

さて、Phongpa 方言において、わたり音として現れる/r/もまたしばしばふるえ音として実現する。このふるえは一定の時間継続するため、あたかも先行する主子音と/r/の間にさらに音声学的なわたりが挿入されるような印象を与える。このため、主子音が有気音であったとしても、[r] 部分が無声音化することは確認されない。たとえば、/k^hra/という音列を精密表記するならば、[$k^{hə̯}$ra] と書ける。わたり音/r/は出現条件に制限があり、主子音が軟口蓋閉鎖音と両唇閉鎖音の２種類にのみ後続する。

以下に主子音の調音点別に分類して、具体例を整理する。蔵文形式は音節ごとに Phongpa 方言に対応する形式がある場合はそれを掲げ、ない場合は？を付して示す。チベット文字の表す音価については、格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

3.1 主子音が軟口蓋閉鎖音

主たる子音に先行する子音がないもの

語義	Phongpa 方言	蔵文
血	ˉkʰrɑʔ	*khrag*
船	ˊkrɯ	*gru*
鷹	ˋkʰra	*khra*
麦ののぎ	ˊkrə ma	*gra ma*
炭	ˉsʰə kʰruʔ	*sa khrol*
ベッド	ˋkʰrə	*khri*
ナイフ	ˆkrə	*gri*
さや	ˊkrə ʂʰuʔ	*gri shubs*
模様のある	ˉkʰra kʰra	*khra khra*
秘密にする	ˊkʰra ɦdiː	? ?
伝染する	ˊkru	?
凍らせる	ˋkʰrũ	?
道案内する	ˊlɑ̃ ˋkʰrəʔ	*lam khrid*
恥ずかしがる	ˋkʰrɯʔ	*khrel*
叱る	ˊkʰroː	*khro*

前鼻音つき

語義	Phongpa 方言	蔵文
胆嚢	ˋŋ̊kʰrə ʰpa	*mkhris pa*
努力する	ˋŋ̊kʰrə ɦmiʔ ɦgrũ	*mkhris mid ?*
生まれる	ˋŋ̊kʰrɔ̃	*'khrungs*
灌漑する	ˋʈʂʰɯ ˋŋ̊kʰrɯ	*chu 'khru*
洗う	ˋŋ̊kʰrɯ	*'khru*

前気音つき

語義	Phongpa 方言	蔵文
髪	ˋŋgo ʰkra	*mgo skra*
酢	ˋʰkra ʰɕɯː	*? skyur*
アリ	ˊɦgrɯː ma	*grog ma*
アリの巣	ˊɦgrɯː ma ˋtsʰɔ̃	*grog ma tshang*
努力する	ˋŋ̊kʰrə ɦmiʔ ɦgrũ	*mkhris mid ?*

もむ	ˆ^{ɦ}gra	?
怖がる	ˋ^{h}krɑː	*skrag*
驚く	ˉ^{h}krɑː ^{ɳ}ɖuʔ	*skrag ?*
腫れがおさまる	ˊ^{ɦ}grɯː	?
腫れる	ˋ^{h}krõ	*skrang*

3.2 主たる子音が両唇閉鎖音

主たる子音に先行する子音がないもの

語義	Phongpa 方言	蔵文
がけ	ˆprɑʔ rə	*brag ri*
岩石	ˊprɑʔ nɑʔ	*brag nag*
胸	ˊprɔ̃ ta	*brang ?*
リス	ˊt^{h}oː prɑː	*thang bra*
妖精	ˊpra ^{h}sũɪ	*? srung*
細い	ˊp^{h}riː ɲã	*phra ?*
甘い	ˋ^{ɦ}brɔ̃ ˊpruʔ	*sbrang ?*
がけの多い	ˊprɑʔ ^{ɦ}dĩ	*brag ldan*
落ちる	ˊprəʔ	?
逃げる	ˉprɵʔ	*bros*
書く	ˊprə	*bri*

前鼻音つき

語義	Phongpa 方言	蔵文
雷	ˆ^{m}brɔʔ ^{ɦ}luʔ	*'brug glog*
水田	ˋ^{m}breː ʐə̰	*'bras zhing*
龍	ˊ^{m}brɔʔ	*'brug*
穀物	ˋ^{m}brɯ̃	*'bru*
稲	ˆ^{m}breː ^{h}tswa	*'bras rtswa*
米	ˋ^{m}breː	*'bras*
横の	ˊ$^{m̥}$p^{h}riʔ $^{m̥}$p^{h}riʔ	*'phred 'phred*
奪う	ˊ$^{m̥}$p^{h}roʔ $^{m̥}$p^{h}roʔ ˊbeʔ	*'phrog 'phrog byed*

前気音つき

語義	Phongpa 方言	蔵文
雲	ˋ^{h}prə̃	*sprin*
猿	ˋ^{h}prə mjeː	*spre'u ?*
蛇	ˆ^{ɦ}brə	*sbrul*
ハエ	ˊ^{ɦ}brɔ̃ nɑʔ	*sbrang nag*

ミツバチ	ˊʱbrɔ̃ mə	*sbrang ma*
砂糖	ˋʱbrɔ̃	*sbrang*
さる年	ˋʰprə	*sprel*
甘い	ˋʱbrɔ̃ ˊpruʔ	*sbrang ?*
備え付ける	ˊʰpriʔ	*?*
麻痺する	ˊʱbrəʔ	*sbrid*
滑って倒れる	ˉʰprə	*?*

3.3 Phongpa 方言の形式と蔵文との対応関係

以上に見たように、Phongpa 方言のわたり音/r/は、蔵文足字 r と対応関係を認めることができる。しかしながら、蔵文足字 r をもつすべての例でわたり音/r/が現れるわけではない。以下に例をあげる。

語義	Phongpa 方言	蔵文
乞食	ˋʰt̪ɔ̃ l̥ɔ̃	*sprang slong*
牧民	ˋⁿɖɔʔ ʱdzə	*'brog rdzi*
客	ˋⁿɖʉː po	*'grul po*
6	ˉt̪ɔʔ	*drug*
鬼	ˉxa ⁿɖə	*sngags 'dre*
えんどう	ˉʰsɛ̃ ma	*sran ma*

以上の例は、蔵文足字 r をもつ例について、そり舌閉鎖音に対応する場合と、足字 r 部分が脱落する場合もあることを示している。口語と蔵文との対応関係では、口語形式と文語読書音が１方言内に併存することがしばしば認められる。ただし、以上の語例を考えると、必ずしも読書音が現れるとは言い切れない。このことから、Phongpa 方言では、わたり音/r/が先行する子音とともにそり舌閉鎖音へ音変化を起こすか脱落する途上にあるということも考えられる。

上述の問題点を含め、Phongpa 方言の雲南カムチベット語における位置づけを、節を改め考察していくことにする。

4 雲南カムチベット語における Phongpa 方言の歴史言語学的位置づけ

カムチベット語において、わたり音として/r/が認められる例は極めて少ない。チベット言語学の観点から見れば、わたり音/r/が蔵文足字 r と対応することに何ら特別な意義が認められるものではない。しかし、口語形式として/r/が留保していると解釈できる点は、チベット系諸言語の共時的特徴に基づいて歴史言語学的分析を行う場合、大きな意義がある。

冒頭に述べたとおり、雲南カムチベット語の中で Phongpa 方言のみがわたり音/r/をもつ。Phongpa 方言以外の諸方言では、蔵文足字 r に対応する音形式について、次のように大きく３種類の類型がある。

1. 先行子音とともにそり舌阻害音（閉鎖音または破擦音）に対応

2. 先行子音とともに口蓋阻害音（前部硬口蓋または硬口蓋における閉鎖音または摩擦音）に対応

3. 蔵文足字 r それ自体に対応する子音音価がなく、後続母音のそり舌化または咽頭化に対応

以上の特徴は、西田 (1987) などの議論にもあるように、単独でも他の複数の音対応との総合的関係においても、方言分類の上で重要な指標となる。１のタイプは得榮徳欽方言群をはじめ雲南以外の地域に分布するチベット系諸言語でも広く認められるものである。Phongpa 方言が話される地点に隣接する地域で話されるカムチベット語方言は得榮徳欽方言群に属し、このタイプを示す（鈴木 2019）。２のタイプは香格里拉 [Sems-kyi Nyi-zla] 方言群建塘 [rGyal-thang] 下位方言群、雲嶺山脈東部下位方言群に認められる（鈴木 2017）。３のタイプは香格里拉方言群維西塔城 [mTha'-chu] 下位方言群に認められ、チベット系諸言語の中でも類型的にまれな音対応に数えられる（鈴木 2010, 2011）。

以上のいずれのタイプについても、蔵文足字/r/それ自体が音変化にかかわっている。Phongpa 方言におけるわたり音/r/は古音の留保であると考えられるため、どのタイプにも関連しうることになる。この問題についてより深く考察するにあたり、同じくわたり音/r/をもつカムチベット語 sProsnang 方言（鈴木 2007）と Phongpa 方言の事例を対照してみたい。sProsnang 方言のわたり音/r/の音価については、次の記述がある。

> r 音自体の有声性は、先行子音が有気音であれば無声化し、そうでなければ有声音で実現される。たとえば/krə/は、精密表記を行うならば、[kɻᵊ̥ʿə] と表しうる。（鈴木 2007:34）

この記述と比べると、Phongpa 方言の音声実現は sProsnang 方言と異なる点が２つある。１つは/r/の音価であり、もう１つは/r/の有声性に関する条件変異の現れである。前者について見ると、sProsnang 方言では接近音である一方、Phongpa 方言では３節冒頭に述べたようにふるえ音として実現される。後者について見ると、sProsnang 方言では r 音の有声性が先行子音が有気音のときに無声化するが、Phongpa 方言では有声ふるえ音の継続が認められる。

このわたり音/r/をめぐる音特徴の異なりは、音変化の方向性についても示唆を与えるものとなる。sProsnang 方言では、共時的特徴として、先行子音とともにそり舌阻害音を形成することが確認される。ところが Phongpa 方言では、先行子音とともにそり舌阻害音を形成するのは **3.3** で述べた特定の例を除いて音声学的変異としては現れないが、/r/そのものが脱落する事例が確認される。もちろん、これら２つ方言における音声学的変異の違いがわたり音/r/自体の音声特徴にのみ由来することであるかどうかは検証すべき課題ではあるが、観察しえた事実から推察するに、両者の関連はかなりの程度認めることができる。

このことは、音変化の類型から考えると、Phongpa 方言は１のタイプすなわち得榮徳欽方言群とは異なる性質を示しており、むしろ２や３のタイプすなわち香格里拉方言群と近いといえる。というのも、後者は蔵文足字/r/がまず先行子音から独立して音変化を起こしたと考えられるからである。３のタイプは先行子音の調音位置を維持することが分かっているため、蔵文足字/r/が独立して音変化を起こしたと考えるのは問題ない。２のタイプでも、諸方言の反映形（口蓋音系列；鈴木 2017 参照）をみれば、/r/音の調音位置そのものが関連した音変化とはみなしがたい。/r/部分が独立して何らかの音変化を起こし、そののち先行子音とともに口蓋阻害音系列に変化したと考えるほうが妥当である。

加えて、Phongpa 方言には香格里拉方言群建塘下位方言群、雲嶺山脈東部下位方言群、維西塔城下位方言群とのみ共通する改新が認められる。それは蔵文 c, ch, j にそり舌破擦音が対応することである。Phongpa 方言の具体例として、ˋʰʈʂʉ「10」(蔵文 *bcu*)、ˋʈʂʰʉ「水」(蔵文 *chu*)、ˊʈʂa「茶」(蔵文 *ja*) などがあげられる。これらに認められるそり舌破擦音が **3.3** で見た例が示すそり舌閉鎖音と対照的である点もまた、上述の香格里拉方言群の３つの下位方言群の示す特徴と共通する。

さらには Phongpa 方言の語彙にも香格里拉方言群の特徴を見て取ることができる。たとえば、ˊla ma「速い」は維西塔城下位方言群で用いられるが蔵文とは対応しない形式である。ˊbe?「する」は蔵文 *byed* と対応するものの、音形が特異で雲嶺山脈東部下位方言群と維西塔城下位方言群で認められる音形と共通する。ˊŋwo「行く」は蔵文 *'gro* と対応するが香格里拉方言群の多くの方言で足字 r が脱落した形式と対応する（Suzuki 2018:104-105）。

以上、音変化の方向性、音対応の体系性、語彙の共通性などの諸特徴を踏まえると、Phongpa 方言と香格里拉方言群の間に密接な関係を認めることができ、得榮徳欽方言群とは距離があると言える。すなわち、歴史言語学的に見て、Phongpa 方言は香格里拉方言群に属する方言であると推論できる。

翻って、以上の推論は地理言語学的に特別な意味がある。筆者はこれまで、雲南省内の瀾滄江流域のカムチベット語諸方言は、たとえ音対応に大きな違いがあっても、みな得榮徳欽方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属し、その音対応と語彙形式の多様性は ABA 分布を踏まえて地理言語学的観点から説明できるのではないかと考えてきた（Suzuki 2018、鈴木 2019）。ところが、Phongpa 方言の記述によって、瀾滄江流域のうちの下流部の方言はそもそも系統的に得榮徳欽方言群に属さない可能性がでてきたことになる。同地域における地理言語学的研究の弱点は、対象言語/方言の話者についての歴史的背景について不明な点が多いことである。これは参照すべき歴史書が極端に少ないために、ある言語特徴の分布をどのように解釈するかを支える根拠を見いだせないということによる。Phongpa 方言の存在は、瀾滄江流域にも香格里拉方言群の話者がいる可能性を高くし、これが言語史とともに民族移動史にも示唆を与えるものとなる。

5　まとめ

本稿では、Phongpa 方言のわたり音/r/を含む語形式を記述し、その蔵文対応関係を明らかにして、わたり音/r/が蔵文足字 r に対応することを示した。ただし、蔵文で足字 r をもつ例すべてにわたり音/r/が対応するわけではない。この特徴と sProsnang 方言の記述を対照しつつ、わたり音/r/を含む例が音変化の途上にあることを述べた。最後に、雲南のカムチベット語諸方言における Phongpa 方言の音形式がもつ意義を考察し、同地域の方言学上の位置づけについて、Phongpa 方言が香格里拉方言群に属すると推論した。

参考文献

華侃　主編 (2002)《藏語安多方言詞匯》甘粛民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社

鈴木博之 (2007)「チベット語中路 [sProsnang] 方言の/r/を含む子音連続」『東京大学言語学論集』第 26 号 31-47

―― (2010)「カムチベット語維西塔城 [mThachu] 方言におけるそり舌化母音―その音声学的特徴の記述と分析」『京都大学言語学研究』第 29 号 27-42 電子版:http://doi.org/10.14989/141808

―― (2011)〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》第 12.2 期 477-500

―― (2017)「音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際―チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』9, 43-64 電子版 : http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/

―― (2019)〈瀾滄江流域鹽井至巴迪段藏語土話中的語音及詞匯異同概況〉鈴木博之、倉部慶太、遠藤光曉編《東部亞洲地理語言学論文集》14-42 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　電子版 : https://publication.aa-ken.jp/sag_mono6_eastern_asian_2019.pdf

Suzuki, Hiroyuki (2018) *100 Linguistic Maps of the Swadesh Word List of Tibetic Languages from Yunnan.* Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf

[付記]

筆者による Phongpa 方言及び周辺地域の調査については、平成 29-31 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者 : 鈴木博之、課題番号 17H04774）および平成 30-31 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」（研究代表者 : 遠藤光暁、課題番号 18H00670）の援助を受けている。